



Title	「前田先生との対話」
Author(s)	高山, 善行
Citation	語文. 2026, 126, p. 4-7
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106097
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「前田先生との対話」

高山善行

前田先生と対話をする機会は実に多かった。食事をしながら、コーヒーを飲みながら、話が二時間を超えることも何度かあった。多くの人と話をしてきたが、家族を除けば、会話の総時間数では最上位に位置するはずである。先生が何を語ったかに関心を持つ向きもあるだろうし、やや大げさに言えば、先生との対話は自分の財産であるようにも思われた。そこで、この原稿の執筆依頼を機に、対話の記憶をきちんと整理しておこうと心に決めた。

ところが、いざ取り掛かってみると、話の内容をほとんど覚えておらず愕然とした。あれだけの時間、いったい何を先生と話していたのだろうか。対話の場所については、阪大の研究室、先斗町のフランス料理店、石橋駅前の喫茶店、松山の寿司店、特急「やくも」の車内などと、次々と頭に浮かぶ。しかし、肝心の話の中心身を忘れてしまっているのでは、まったくお話にならない。

そこで、まとまった文章にするのは諦め、記憶に残る対話場面を時系列順に並べ挙げて、この場を凌ぐことにする。先生にとってはありがた迷惑であろうが、私にしてみれば長年積み重ねてき

た失礼の数が、ひとつ増えるだけのことである。

初めて先生とお会いしたのは大学院入試の面接であるが、言葉のやりとりは全く覚えていない。私が研究指導を受けるようになるのは、大学院博士課程に進学してからである。修士課程でご指導いただいた宮地裕先生が定年退職され、そのあとを先生が引き継いでくださったのである。博士課程に一年ほど在籍した後、助手を四年勤め、阪大を転出して大学教員になってからの十年は学位論文の指導を受けるために研究室に通った。そのほか、学会、研究会でもお会いしていたから、対話の機会が多くなるわけである。ただ、話題のほとんどは仕事か研究に関することであり、それ以外についてはあまり話をしていない。だから、先生のご趣味やご家族のことなど、プライベートな面は、いまもよくわからないままである。こちらから聞けば気さくに話していただけたと思うが、私のために貴重な時間を割いて下さっていると思うと、話題にする気にはなれなかったのである。

私は文法が専門で、先生のご専門は語彙である。博士課程に進

学してすぐの頃、研究室にご挨拶にうかがうと、「佐藤喜代治さん（＝先生の師匠）は仁田君（＝仁田義雄先生）をよく指導した。私にはとてもできないけど」と言われたのを覚えている。当時、阪大には、教養部に山口堯二先生、日本学に寺村秀夫先生、先輩の森山卓郎さんがおられ、文法専門の先生方に遠慮されているような感じがしていた。先生には修士課程に入ってから指導教官をお願いして断られている。そのときに、「やっぱり文法は宮地先生に」とおっしゃったのが、頭のどこに残っていたのかもしれない。

それから後も、「××さんが、あなたの研究を面白いんじゃないかと言っていましたよ」とか、文法研究者の名前を挙げて、「これは、××さんと××さんの時代だから、指導してもらってください」というように、どこか他人事のように、文法とは距離を置いておられるようだった。ずっと後になって、先生御自身が文法と疎遠になる経緯をお書きになっている（『日本語学大辞典』について思うこと）『日本語の研究』一六巻一号、二〇二〇年四月）。それを読んだとき、私への対応の理由がわかった気がした。

助手時代は、研究室の運営、図書の購入、集中講義の講師のお世話など、仕事の打ち合わせの話が多かった。先生と接したところのある人はわかると思うが、仕事を指示するときも常に紳士的な口調であった。そして、助手の仕事を増やさないように配慮してくださっていた。事情あって休日出勤が続いたときは、「このままだと潰れちゃうよ」と言って止めてくださった。仕事の依頼がな

いので不安になり、「何かお手伝いできることはありませんか」と申し出たことがあった。「じゃあ手伝ってもらいましょうか」と作ってくださった仕事は、『漢字講座Ⅰ 漢字とは』（明治書院）の付録「中国・日本対照文字年表」である。この小年表は先生との共同執筆であり、私にとって文法以外の分野での初めての業績となった。

私が阪大を転出してからは、講義の仕方、学内業務など大学教員としての働き方が話題になることが増えた。新設の学科に着任したため雑務が多く、研究の時間がとれず悩んでいると打ち明けたときは、「私なら思いっきりさばりますけどね」と笑い飛ばされ、悩んでいる自分がばからしくなった。それ以後、自分なりの「働き方改革」を実行するようにした。また、研究費の少なさをばやいたときには、「科研費を申請したらどうですか」と言って下さり、それから申請するようになった。研究をするには時間とお金が必要だが、その両方を確保することができたのは、先生のご助言によるものである。

研究については、「広い視野を持ってください」と繰り返しおっしゃっていた。学問全般に使えることではあるが、文法の世界に閉じこもっていた私への戒めのように聞こえた。私の大学院在学中、先生はそれまでの研究をおまとめになり、『国語語彙史研究』（明治書院）を刊行された。国文研究室のなかでは、先輩の李漢燮（イ・ハンソップ）さんが購入のとりまとめ役となり、刊行直後に割引価格で手に入れることができた。

御著書を開くと、語彙体系を基礎づける際に数学（ゲーデルなど）、言語哲学（バートランド・ラッセル）の文献が引かれ、生活形式、文化史にまで論が及んでいる。最初に読んだときには、漂う小舟が大海に呑み込まれるような恐怖を味わったものである。それだけに、先生の「広い視野を」という言葉には説得力があった。還暦を過ぎた今、様々な分野に手を伸ばしているが、視野はさほど広がっておらず恥入るばかりである。

先生はいつもにこやかだが、ときに感情を表に出されることがあった。ある組織で仕事をされたときの体験を話してくださったことがある。不合理なシステムがあったので、強く改善を申し入れたが、全く聞き入れられなかったと大いに憤慨された。そして、「（その組織から）仕事が来るかもしれませんが、絶対に引き受けないでください」とキツい口調で言われた。「絶対に」に力がこもっていた。また、ある学会に入会しようとする、「その学会に入る必要はないです」と断定されたことがある。先生も学会員だったから不思議に思ったが、なにか不合理なことがあったのだろう。

先生の研究に対する評価は厳しかったが、個人を批判することはなかった。怒りの矛先は組織や制度（システム）に向いていた。理想論に流れるのを嫌い、常に現実的な考え方をされていたと思う。感情的になられたときは、言葉がやや荒つぽくなるが、その後何事もなかったように紳士的なモードに戻られる。その平衡感覚のおかげで、後味悪く会話が終わることは一度もなかった。

いまから十五年前、「改定常用漢字表」（文化庁）の説明会で福井に来られたときの話である。説明会の開催日と場所を新聞で知り、せっかくの機会なので、一席設けようと思い立った。ご自宅に電話すると、幸い説明会の前夜はあいているとのこと、二人での夕食会が実現した。福井市内にある料亭の個室で、庭の雪景色を眺めながら穏やかな時間が過ぎた。

地元での漢字教育の現状を知ってもらおうと思い、私がある学者の名前を挙げた途端に先生の表情が一変した。そこから、その学者の研究に対する批判が始まる。具体的な研究事例を挙げ、「方法に問題があり、八割は間違っている。二割くらいは正しいが、偶然当たっただけだ」「そういう研究を取り入れるのは教育上良くない」などと、完膚なきまでにという感じであった。眼光の鋭さと凄まじい熱量は、以前と少しも変わっていない。しばらくして、「情報を教えてくれてありがとう」と言って元に戻られたが、収束の仕方も以前と変わらなかった。

先生とお会いする機会はその後もあったが、あまり長くは話をしていないから、この夜の対話が強く脳裏に焼き付いているのだろう。そのときの話題もやはり仕事と研究であった。

いま自宅のノートパソコンに向かって、この原稿を打っている。作業もようやく終わりが近づいてきた。ひと息ついて右斜め下に視線をやると一冊の大型事典が目につく。先生が編者をされているものである。一助手をしていた頃、夜中に電話が鳴った。先生から、「原稿を書いたので、急いでワープロで打ってください」と

いう依頼だった。そういう仕事は初めてのことと驚いたが、とにかく急がなければならない。翌朝原稿を受け取ると、一晩かけてワープロ打ちし、最短時間でフロッピーをお渡しした。数日後、研究室と呼ばれ、「御礼に差し上げます」と手渡していただいたのが傍らの事典である。この本には特別の思いがあり、手の届く位置に置くようにしている。

（たかやま・よしゆき 福井大学教授）